

東方炎上人 ～森羅日下 部が幻想入り～

東方人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シヨウを助けない・・・その一心でネザーへ飛び込んだ森羅。そこで、やつとの思いで弟の「シヨウ」との再開を果たしたのも束の間、突然現れた白装束の女に死の淵まで追いやられ、シヨウも奪われてしまう。そんな中、彼が目覚めたのは東京皇国とは全く違う世界。そう、彼はいつの間にか幻想入りを果たしてしまう。そこで彼は様々な出会いを果していく・・・▼本作は炎炎ノ消防隊と東方Projectのクロスオーバー小説です ▼キャラ崩壊の恐れあり ▼炎炎ノ消防隊は現時点での既刊、16巻まで読破済み。東方は原作プレイかつ公式書籍も持ってます

目次

第壹話	ヒーロー、幻想郷へ	1
第貳話	自己紹介	10
第参話	妖怪戦	18

第壱話 ヒーロー、幻想郷へ

実の弟、シヨウと再開を果たした森羅だったが白装束の女にやられ、死亡寸前まで追いやられる。

「シヨ・・・シヨウは・・・」

薄れゆく炎。そこで記憶の糸が途切れる・・・

「なかなか未練がましい最後だったじゃない・・・アナタ」

暗い。自分の姿も見えない場所で

見ず知らない女の声が聞こえる。

「なあ、俺って・・・死んだのか？」

「んー？そうねえ・・・少なくとも貴方が今向かつてる場所は天国でも、地獄でもないわ。」

理解に苦しむ一言だ。天国でも地獄でもない？じやあどこなんだ。

「それより、ここは？あんたは一体……？」

幾つかの質問を女に投げてみた。すると、

「悪いけど、そんな長々とアナタと話してるヒマはないわ。」

質問を断られた。

「つと、そろそろ時間ね。とりあえず、これから私の言うことを聞きなさい。」

ゴクリ……

唾を飲み、聞く耳をしつかり持つて女の言うことを聞いた。

「森羅日下部……アナタを……」

”忘れ去られた者達の楽園 幻想郷”へ招待するわ」

何のことだか全く分からなかった。まず、なんで名乗つてもないのに俺の名前を知っている？そしてゲンソーキョーってなんだ？そんな疑問を抱いていると、不思議とそこでまた記憶の糸が途切れた。俺は次、どこで目覚めるんだ……

「切り離シタ宇宙！」

これは……夢か……あの時の。

「おや?どうかした?」

こいつは……あん時の……

「時が止まらない、加護を切られた……?」

装束服の女はシヨウに指を向けた。そして……シヨウはその場に倒れ付した。

「シヨウ!!」

必死で叫ぶ。しかし、反応はない。

だが次の瞬間、シヨウは起き上がった。しかし、意識がないように彼は女の方へ寄った。

「……!?!」

何が起こったのか、全く分からなかった。

女は次に、俺の方へ寄ってきて、そして、俺の胸に突き刺さってる剣を踏み躪った

「なんだ、結構元気じゃん!すごいすごい」

怪訝されるような言い方だ。そして、

「んじゃ、おいらたちも行くのか?」

マズイ、このままじゃ俺も……そう思った時、

バチン!

何か当たった音が女の方からした。見てみると向こうの方には火縄中隊長がいた。そして、何者かが女を吹き飛ばした。

「ハネる気でいったのにはじかれた・・・」

この声は間違いない。アーサーだ。

辺りを見渡せば、ヴァルカン、茉希さん。それに環や大隊長、ヴィクトルさんもいた。みんな、俺のために戦っている。なのに、俺は・・・俺は。しばらくして、

「生きてたら・・・またね〜」

女がシヨウを連れて去って行った。

「待て・・・」

意識が朦朧としてきた

「シヨウを・・・」

『返せッ!!!』

我に返った。

ここはどこだ？少なくとも病院じゃないし、こんな古臭い感じの家、近所でも見たことがない。何が起こったのか分からず、困惑していると、

「よう、目が覚めたか？」

女の声が出た。一瞬、あの暗闇で話した女と思ったが声明らかに違う。もつと、

クールな声だ。左に目をやった。そこには、屈んでるがらどれ位かは分からないがとにかく長い白髪。そして、白いシャツに赤を基調とした少し柄が入ったサスペンダー付きのもんぺを履いた女が立っていた。

「誰だ・・・お前？」

とりあえず名前を聞いてみることにした。

「藤原妹紅。妹紅でいいさ。それより、アンタの名は？」

「俺は、森羅日下部だ。」

とりあえず、互いに自分の名前を名乗ったところで

「それにしても・・・凄い包帯だな。」

そう言われて体を見ると、確かに胸や腹にかけて包帯が巻かれてた。シヨウを取り戻すという一心であまり気付いてなかったが俺は相当、傷を負っていたらしい。

「そうだ、シヨウ！」

もしかしたらシヨウもいるかもしれない。

「妹紅！俺を拾った時、近くに俺より小さい白髪の少年を見なかったか！」

思わず妹紅に問いかけた。すると、

「うーん・・・そいつはちよつとなあ・・・」

何やら呻き始めた。

「なんだ!? ショウに! ショウに何かあったのか!？」

「落ち着け。私はただ、お前を保護してるだけであつてお前が倒れてた時のことは分かんらん。」

「そ、そうだったのか・・・」

「なんか、取り乱して悪いな。」

とりあえず、森羅は妹紅に謝つた。

「まあ、いいつてことさ。それと一応言っておくと、お前を拾つたのは私の友人の慧音さ。この家も慧音の寺子屋なんだ。」

「へー・・・」

とりあえず聞き流した。すると、

ガラガラ

戸を開ける音がしたかと思えば、

「ただいまー」

また別の女の声でした。

「お、噂をすれば・・・」

足音が近くなつた。

「悪い悪い妹紅。少し遅くなつちやつたよ。あ、君、目が覚めたようだね。良かったよ

かった。」

「あ、どーも」

とりあえず軽い会釈と挨拶をしいた。少し青みがかった白髪に青基調の服。恐らくこの女が妹紅の言う慧音という人物なのだろう。

「早速、話しを聞きたいところだが・・・君、腹が減ってるだろう？」

突然の質問だ。確かにかなり腹が減ってる気がしたので

「おう、物凄く腹が減った気がする。」

とりあえず答えてみた。

「そうかそうか。それなら少し待ってる、今すぐ、昼飯の支度をする。妹紅、少し手伝ってくれないか？」

「分かった。」

そう言うのと二人は部屋を出て、厨房の方へ向かった。そして30分ほど経ったところ
で

「お待ちせ〜」

そう言つて慧音と妹紅が食事を運んできた。

食事は見たところ、何の変哲もない野菜炒めと味噌汁、そして森羅の好物の白米だ。

ただ・・・

「なんか・・・俺のだけ絶対に量多いよな・・・」

そう。妹紅や慧音の分より明らかに量が多い。具体的に言うと、ご飯が盛られている器はお茶碗ではなくどんぶり。(しかも山盛り) 野菜炒めは他より見積もって約2.5倍ほどもあった。

「当たり前だろう！その外見だとちようど育ち盛りなんだから、たんと食べないと！」

そんなやり取りを横目に妹紅は

「(おいおい・・・、いくら育ち盛りでもそこまで食べないだろ・・・)」

と思いつつも笑っていた。

そして、

「いただきます」

と一礼してまずは野菜炒めから頂くことにした。

「あ、思ったより普通だコレ。」

それが安心の意味なのか残念な意味なのかは分からないがとりあえず、食っても毒ではない。

「おおっ！いい食いつぶりだねえ！(ご飯のおかわりもまだあるぞ?)」

人の食いつぶりを見て喜んでる慧音と

「(森羅・・・無理してないか・・・?)」

心配そうな目でこちらを見てくる妹紅を横目に黙々と食べ続けた。そして数分後……

「ごちそうさまでした」

と3人で一礼すると

「ああく、食った食った。」

と、森羅が一息ついたところで、

「さてと、青年。」

「腹ごしらえも済んだことだ。とりあえず両者、聞きたいことが山積みのはずだから、これより話し合いの場を設けたいと思うのだが大丈夫か？」

慧音の呼びかけに対して森羅は

「おう、問題ない！」

と返した。ここから互いの素性が明らかとなっていく……

第弐話 自己紹介

「ではまず青年。君の名を教えてください。」

一瞬、「？」マークが浮かんだがよくよく思えばまだ慧音には名前を明かしてなかったなかつたことに気付いたので明かすことにした。

「俺は森羅日下部だ。」

「ふむふむ、森羅日下部か・・・」

「ではこちらの素性も明かしておこう。私は上白沢慧音。この近くの寺子屋で教師をやつてる。改めて、よろしく頼む。」

妹紅から聞いたことだがしつかり聞いておいた。そして、

「おう、よろしくな！」

と返した。

「なあ、妹紅から聞いたけど俺を拾つたのはアンタだよな？」

「ああ、確かに森羅、お前を拾つたのはこの私だ。それが何か？」

確認が取れたので森羅は、前々から気になつてたことを聞く。

「その・・・俺を拾つた時、近くに白髪で白い鎧を身に付けた少年を見なかつたか？」

という質問に対し、慧音は

「そうだな・・・確か、そんな白いヤツはいなかったし、目撃情報も聞いてないな・・・」

「そうか、分かった・・・」

森羅は少し落胆した。すると慧音は

「その、少年がそんなに・・・大事なのか？」

慧音の質問に対し、

「ああ、すごい大事さ。」

と下を向いて返事した。その返事に続いて今度はシヨウのことについて話し出した。

「ソイツは俺の弟で象日下部って言う。昔、俺は自分の力のせいであつてつきり殺したと思つてた。けど、ネザーで・・・やつと会えた。けど・・・シヨウは・・・洗脳されてた。」

「それは・・・本当か？」

という慧音の声に

「ああ。恐らく、一緒にいた白装束の女さ。あいつがシヨウを操っていた。その後、なんとかシヨウを連れ戻そうとした。だけど・・・シヨウはアイツに奪われちまった・・・」
今でも鮮明に覚えている。シヨウが連れ去られた時のことを。その時のことを思い出し、森羅は今怒りに満ちていた。

「クソツ!!」

思わず怒りの感情が口に出てしまった森羅に妹紅は

「まあ、とりあえず一旦落ち着け。ここにはその女もいない。まあ、お前の弟もいないが……」

と言い、なんとか森羅を落ち着かせた。

「なるほど。だからお前はあんなにキズだらけだったのか。」

「これを聞いた妹紅が慧音に一つ、質問をした。」

「なあ慧音。森羅を見つけた時の様子ってどんな感じだったんだ?」

「この質問に対し、慧音は重い表情で答えた。」

「ちようど迷いの竹林の入口辺りに横たわってな……なかなか酷かったな。なんせ全身血まみれでキズだらけ。それに胸には剣がグツサリ刺さってた。正直、どういうマネをしたらこんなことになるのかをこっちが聞きたいくらいだったよ。」

「じゃ、永遠亭に運んだんだな。」

「ああ。剣が胸に刺さってるから細心の注意を払って運んだよ。」

永遠亭……? 何だそれ? と森羅は疑問に浮かべる。

「あー、すまんすまん。永遠亭って言うのはな、さつき言った“迷いの竹林”という場所の奥にあるお屋敷さ。そこには“八意永琳”ってヤツがいて、そいつの所に運べばどん

な怪我やキズ、病気だろうと治る。」

そんなヤベエヤツがいんのかよ・・・と思った。ここで急に妹紅が

「そーいえば、森羅にまだ幻想郷について何も教えてなかったな・・・」
と呟いた。

「なんだ、まだ幻想郷について教えてなかったのか。」

「ちようど話そうと思つたところで慧音が帰つてきたからな。」

「そうだったのか。それなら幻想郷について森羅に話した方がいいな。」

「ああ、それがいい。」

「よし、では森羅。ここが君のいた世界ではないということは分かつてるよな？」

「ああ、確か来る時に見た夢の中に出てきた変な女が言つてたな。」

とりあえず、ありのまま起きたことを言つた。

「やつぱり紫の仕業か・・・」

という妹紅の独り言に森羅は

「紫つて言うのか？その女？」

ということを口にした。すると妹紅が、

「まあ、推測だがな。」八雲紫 つてヤツがいてそいつはとにかく、神出鬼没なんだ。”
スキマ” つてやつを駆使してどんな所にも行ける。無論、外の世界にもな。だから外か

ら来る迷い人にはだいたい、紫が関わってることが多い。」

「へ、へえ〜・・・」

正直、なんの事なのかさっぱり分からなかった。

「話が脱線してしまったな・・・では気を取り直して、幻想郷について説明するぞ。」

「おう、頼む。」

「幻想郷というのは私達が住んでる世界のことだな、博麗大結界によつて外界からは隔離されてるんだ。」

「幻想郷には人間以外にも様々な種族が住んでいる。例であげるなら妖怪や妖精、神に仙人・・・この他にもまだまだいろいろぞ。それに、かく言う私も人間じゃないしな。」

「慧音つて人間じゃないのか!？」

思わず、口がポカーンと開いた。

「ああ、私はこう見えても獣人だな。満月の晩には頭に角が生えて”白沢”に変身してしまうんだ。」

ポカーンと開いた森羅の口が更に大きく開いた。そりやそうだ。確かに目の前で人が燃えるような現象は見慣れている森羅だが、目の前で普通に話してる人間が妖怪になるなど、森羅にとっては到底信じられない。まあ、慧音達からすれば人が燃える方が相信じられないことなのだが。

「じゃ、じゃあ妹紅も妖怪なのか・・・？」

という森羅の咄嗟の質問に妹紅は

「いや、私はただの人間だよ。一応な・・・」

その一応がどういう意味なのかは知らないが別にそのことについて触れるつもりは森羅にはなかった。と、ここで我に返った森羅はひとつの質問を二人に投げた。

「そーいや、妖怪とかってやつぱり戦闘を仕掛けてきたりとかすんのか？」

森羅の純粹な質問に対し、妹紅が答えた。

「もちろん。特に妖怪などは好戦的な連中が多いからな。」

「へえ、そーなのか。」

少し関心を持ったように思える感じで森羅は返した。

「また、話が脱線してしまった・・・」

慧音が横槍を入れた。

「あ、すまんすまん。」

森羅が慧音に返した。

「まあ、分かればいい。じゃ、話を続けるぞ。」

「急だが森羅、君に1つ問題を出そう。」

「えっ？おっ、おう。」

「この幻想郷での妖怪や妖精の戦闘はどんなものか、分かるか？」

これがどういう事なのかは分からないがとりあえず、

「普通に格闘戦とかじゃないのか？」

と返した。

「まあ、確かに格闘戦もする奴はするんだが、この幻想郷では主に「スペルカードバトル」というものを主な戦い方なのさ。」

「す、スペルカード・・・バトル・・・？」

何のことだか全く分からない。

「スペルカードバトルというのは、弱い妖怪と強い妖怪が戦う時、そして人間妖怪が戦う時に対等に戦えるように作られたものだ。そもそもの歴史を辿ると博麗の巫女のもとにとある妖怪がきてそそいつが「命名決闘法案」なるものを提出しそして・・・」

「(長え・・・)」

見た感じ、慧音はすっかり自分の世界に入ってしまったようだ。それを見かねた妹紅は

「おい慧音。お前また自分の世界に入ってるぞ。」

と慧音を注意した。

「おっと、すまない。どうもこうも、いつもの教師癖が抜けなくてだな・・・」

「全く、これじゃ説明するのに夜までかかっちゃうよ・・・」

「あははは・・・」

なかなか見ているこの二人は楽しい、森羅はそう心に思った。

「ま、まあともかく。これがだいたい、幻想郷における全てだ。分かったか、森羅？」

「お、おう。なんとなくだけでも分かったな。」

「そうか、それは良かった。」

話し合いはなかなか面白く進み、お互いに打ち解けてきた慧音達に今、一つの人影が
忍び寄る・・・

第参話 妖怪戦

「た、大変だア!!!!」

誰かの悲鳴が部屋中を駆け巡った。この声に驚いた3人は慌てて表へ飛び出した。すると、1人の男が凄い勢いでこちらへ走ってきた。

「な、何があつたんだ!」

妹紅が咄嗟に男に声をかけた。しかし、慌てているせいか落ち着きがなく、何を言っているのか分からない。

「おっさん、一旦落ち着け!何言ってるか分かんねえ!」

という森羅の一言で我に返った男は何が起こったかを喋り始めた。

「えらいことだ・・・妖怪だ・・・それも大軍が・・・人里の中央に・・・」

男の話を聞いた妹紅と慧音の表情が一変した。

「大軍って・・・何匹くらいだ?」

という慧音の質問に対し、男は震えながら

「に、逃げてきたから正確には分からないが・・・多分・・・十数匹ほど・・・」

「十数匹だと!」

二人の顔が強ばった。

「こ、こうしちやいられん！妹紅、すぐ行くぞ！」

「ああ！もちろんだ！それと森羅、お前も来てくれ！」

「おう！」

やり取りを済ませると、全速力で3人は直ぐにその妖怪の大群が現れたという里の中央へ向かった。無論、その道中で交わす言葉などなかった。そして、里の中央につくとそこには、なかなか惨い光景が広がっていた。逃げ惑う人々。辺りに飛び散っている血。端の方で呻き声をあげてる人。間違いない、妖怪に襲われた者がもういたようだ。そしてその中心には犬のようなバケモノが十数匹。

「グワアアアア!!」

雄叫びも聞こえてきた。

「ツ!?なんて無惨な……」

慧音が呟いた。

「これが……妖怪……」

森羅が言葉を漏らした。そして……森羅は怒りに満ちていた。あまりの出来事に、3人はしばらくその様子を傍観していた。すると、妹紅が、

「おい！見てる場合か！とにかくあの妖怪は、私が退治する。だから森羅、お前は慧音と

一緒に周りの人達を安全な所へ……ってあれ？」

妹紅の話が急に止まった。それもそのはず、横にいるはずの森羅の姿が見えなかった。そして、妹紅が振り向いてから1秒と経たないうちに

ドンツ！

という何かがぶつかった音と、

「グエエエエエ!!！」

という妖怪の悲鳴が聞こえた。あまりに突然の出来事だったので何が起こったか分からなかった。そして妹紅が前を向くと、そこに森羅がいた。しかし、様子がおかしい。よく目を凝らしてみるとなんと、森羅の足から灼炎の炎が噴き出していた。それだけじゃない、その奥にいる妖怪は悲鳴をあげながら燃えていた。

「グエエエエエエ……」

悲鳴は次第に弱まったかと思えばバタリと止んだ。一瞬、どこかに逃げ出したのかと思ったが……違う。なんと、あまりの炎の勢いに妖怪が数秒で灰になっていたのだ。た！

「あいつ……人間なのか……？」

慧音が困惑の声を上げた。森羅の不思議な力に妖怪達も一時、騒然としていた。本当なら、ここで兵を引いてくれればありがたいのだが、やはりそう上手くはいかない。あ

ろうことか残りの妖怪が一斉に、森羅目がけて襲い掛かってきた。恐らく、仲間を焼き殺された恨みを晴らすつもりなのだろう。しかし、妖怪達の四方八方から飛んでくる捨て身の攻撃を、森羅は真上に飛ぶことで見事、回避した。結果、妖怪達の動きは乱れに乱れた。そして、動きが鈍くなった一匹を確実に捉えると、今度はそいつにきりもみキックをお見舞した。その後、華麗な着地を見せた森羅だったが、

「ウツ！」

という悲痛の声と共に森羅は膝を地面についた。見ると胸のあたりをおさええている。このままでは森羅は妖怪共に襲われてしまう。そう悟った妹紅はすぐさま妖怪の団体が目掛け、全速力で走りだした。そして、一匹が地に着けてる森羅目がけて襲いかかるその瞬間、

「おりやア！」

妹紅が妖怪を蹴飛ばした。間一髪である。

「立てるか、森羅？」

「ああ。」

そういうと森羅は立ち上がり、戦闘の態勢をとった。

「つたく、お前一応ちよつと前まで重傷負ったケガ人だったんだから、無理すんなよ。」

「す、すまん」

「まあ、とりあえずは戦えるんだな？それなら、敵を二手に分散する！半分は私が、もう半分は森羅、お前が片付けるんだ。分かったな！」

「おう、了か……」

森羅の目が丸くなる。

「なんだ、私の顔になにか付いてるか？」

「いや、何にも！」

悪魔的な笑みを浮かべて森羅は答えた。やりとりが終わると二人は妖怪の集団に真つ向から立ち向かった。妖怪の攻撃は実に単純で、基本的には人に襲いかかることくらいしか考えてないのでワンパターンなパンチやキックの連続で、倒せるが不利な点もある。まずは数が多いということ。森羅や妹紅が既に2、3匹ほど倒してるがそれでもまだ、13匹ほどはいる。これを2人で倒すとすれば1人頭、6、7匹を相手にしなければならぬ。もう1つは、妖怪共は体力に自信があるということだ。さつき妹紅に蹴られた妖怪がもう体勢を立て直してあたり、恐らく軽い一撃程度ではダメだろう。それに先程の通り、森羅はまだキズが完治してないので激しい戦闘だと、また動きが止まってしまい、そこを妖怪に襲われる恐れがある。なので慎重に攻撃を見極め、かつ確実な攻撃を加えなければならない。なので、二人とも最初は相手のペースに任せ、攻撃をいなし、そしてスキができた瞬間に急襲を加え、一気にこちらのペースへ持つてくと

いう作戦をとってららしい。真っ向から飛んでくる拳や足を妹紅は自分の体を使っていなし、森羅は後ろにバックして回避する。ここで本来は戦いに集中せねばならないが、森羅はどうやらそれができてないらしい。

「(間違いないよな・・・確かに、妹紅の体も燃えてたはず・・・)」
そんなことを思いながら戦っていると、

「ツ!?しまった!」

妖怪が一匹、森羅ではなく、脇に倒れ込んでる女性の元へ襲い掛かりに行ってしまった! 「まずい!」と思っただけの瞬間、

「ハア!」

という声と共に、何かは妖怪目がけて猛スピードで飛んできた。そしてそれが妖怪に当たると

ピチューン

という音と共に、妖怪を大きく後方へ吹っ飛ばした。

「(一体、何だったんだ今の・・・)」

と頭の中で思っていると妹紅が

「ボサつとするな! 仮にも今は戦闘中だ! 考え事は後にしろ!」

と、注意が飛んできたので

「悪いー」

と短く返して戦闘に戦闘を続けた。その後、順調に作戦通りの戦闘をし、結果、威勢のあつた妖怪共は息を切らし、今にも倒れそうなくらいヨロヨロになっている。

「どうする？まだやるかい？」

という妹紅の言葉に、妖怪共は残りの体力を使って一目散に妖怪の山の方面へと逃げ帰って行つた・・・

「とりあえず、片付け終わったな。」

「ああ、そうだな。」

妹紅は森羅の感想に軽く返した。すると後ろの方から、

「おーい妹紅、森羅。とりあえずこつちの方も終わったぞ。」

慧音がこつちに向かつてきた。

「お疲れさん、慧音。」

「といつても、あとはケガ人を永遠亭へ運ばないとな・・・」

この妖怪の軍団による被害で幸い、死者はでなかつたものの傷を負つた者が多いので彼らを永遠亭へ運ぶのは一苦労だろう。

「そうか、それなら手分けしてケガ人を永遠亭へ・・・」

と妹紅が言いかけた時、森羅は何か聞きたそうな顔をしていた・・・